



# 日本の生物多様性 —「身近な自然」とともに生きる

市民が五感でとらえた地域の「生物多様性」と「生態系サービス」モニタリングレポート2010

人と自然。いま、むかし。



日本自然保護協会

日本自然保護協会

# はじめに

## 市民による生態系サービスモニタリングとは

### 生物多様性とわたしたちの暮らし

わたしたち人間は、地球上のあらゆる生き物とその生き物たちが関わって成り立つ環境(生態系)の両方が健全であるからこそ、暮らしていくことができます。人が生きていくのに必要な水、空気、食べ物、薬、服や家を作る材料、これらはみな、生き物や自然の中から得ているからです。

この生き物と生き物が織り成す自然(生態系)から私たちが受けているさまざまな恵みを「生態系サービス」といいます。

### 市民が五感でとらえる生態系サービス

では現在、日本の生物多様性や生態系サービスを取り巻く状況はどうなっているのでしょうか。たとえば、レッドデータブックに代表されるように、絶滅のおそれがある生き物については、国や自治体の施策としても取り組みが行なわれ、専門家による調査も行なわれています。一方で、わたしたちにとって「身近な自然」であり、地域の暮らしと関わりの深い生き物や生態系サービスに関しては、地域ごとに異なることもあります。全国規模での調査はほとんど行われてきませんでした。

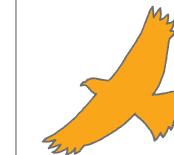
### 地域の人が保全の主役～地域から地球に

地域の生物多様性と生態系サービスを住民が知り、自分たちの暮らしとの関係の中でとらえることは、地域住民が主体となって地域の生物多様性を保全していくうえで欠かせません。

## 生物多様性の道プロジェクト: 生態系サービスモニタリングの概要

### 「生物多様性の道」でゆるやかに全国をモニタリング

生物多様性の道プロジェクト「生態系サービスモニタリング」は、いつまでも大切に残ていきたい地域の自然とそこでの保全活動を「生物多様性の道」に登録して、日本自然保護協会がつくるwebサイト(SISPA:<http://www.sispa.info>)を通して全国の地域・団体がゆるやかなネットワークでつな



### 生物多様性・生態系サービス・保全活動を調べました

「生物多様性の道」に登録された場所では、その場所の生物多様性(生き物や自然のようす)、生態系サービス(自然とのふれあい、自然から受けている恵み)、保全活動(地域の人による生き物や自然を守るための活動)について調べました。

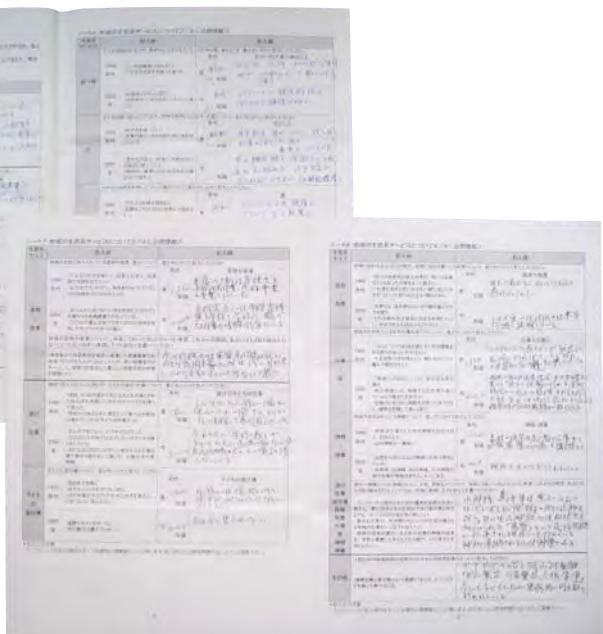
生態系サービスで調べた項目は、食べ物、水、薬、材料、産

業、遊び・仕事、子どもの遊び場、技術・知恵、行事・祭り、神様・神事です。市民による全国規模のこのような調査はこれまで例がありません。市民が五感でとらえた各地の生物多様性を現す貴重なデータとして、今後生物多様性保全を進める上で活用が期待されます。

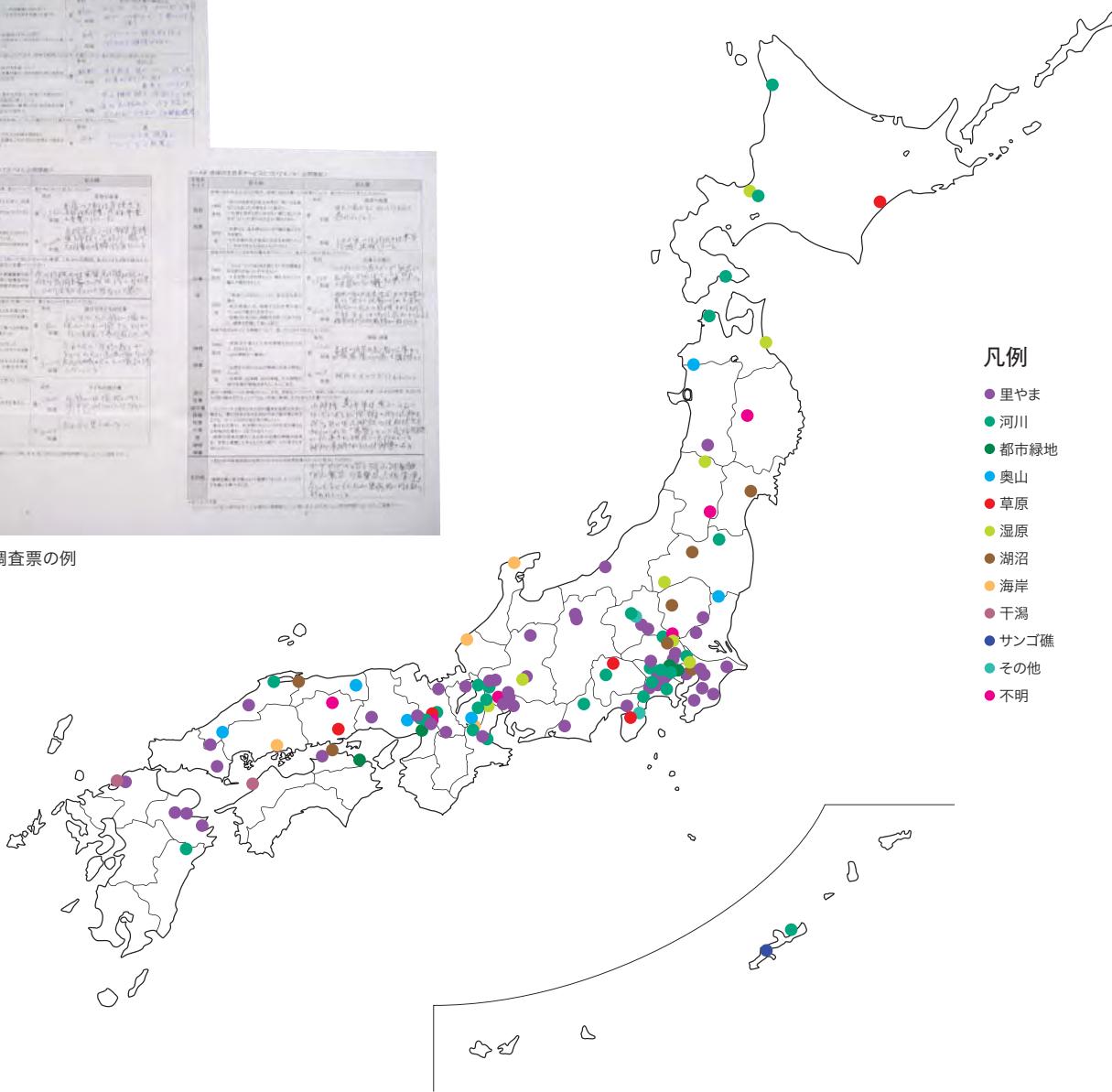


第一次結果は、1年に満たない限られた調査期間で、登録された場所、データとも決して多くはありませんが、各地の特色ある生物多様性と生態系サービスの現況の一断面が明らかになったのではないかと思います。本冊子は、その一部をご紹介するものです。

プロジェクトでは、この度の成果を活かし、これからも地域の人々の思いがつまつた「生物多様性の道」が、未来に向かっていつまでも続いていくよう、モニタリングと保全の活動に取り組んでいきます。



●記入された調査票の例



目次	
はじめに	p1
【生態系サービスモニタリング結果】	
1. 「となりの生き物」の巻	p5
2. 「おやつやおかずになる生き物」の巻	p8
3. 「水もいろいろ」の巻	p12
4. 「生き物はオクスリ」の巻	p12
5. 「身近な自然はホームセンター?!」の巻	p15
6. 「地域の自然を利用した産業」の巻	p17
7. 「子どもの遊びと仕事」の巻	p17
8. 「子どもの遊び場」の巻	p19
9. 「地域で伝える知恵と技術」の巻	p20
10. 「地域の行事と祭り」の巻	p21
11. 「地域の神様」の巻	p22
12. 生物多様性を守る全国の市民団体の活動	p23
おわりに	p25

# 1. 「となりの生き物」の巻

今回の調査の「身近な生き物トップ10」を発表します。

地域でよく見かける生き物や、子どものときに遊び相手になってくれた

生き物たちは、どう変わってきたでしょうか。

昔と今では、ずいぶん顔ぶれが変わっています。付き合いかたも変わってきたのでしょうか。

## 身近な生き物・トップ 10

### 昔 50-60年前(昭和30-40年代)



### 今ここ10年くらい



### ホタルがトップ!「ホタルがいっぱい」の表現は

今も昔もホタルが断然トップでした。ホタルとの付き合い、ホタルへの関心が今も昔も変わらず大きいことがわかりました。ただ、状況はずいぶん変わったようです。かつては、ホタルがいっぱいいたのを「ホタルが乱舞」「ほうきではなくほどいた」「家の中に飛び込んでくるほどいた」「周囲が明るくなるほどいた」「バスの窓から見えるほど川原を飛んでいた」と

多様な表現で報告がありました。今では「ホタルの保護活動でちょいちょい見られる程度」「ホタルが数えられるほどに減った」とちょっと寂しい報告でした。「地域ごとにホタルの復活がさかん」「田んぼの農薬の減少で少しずつホタルが復活してきた」という少し明るい報告もありました。

### 「昔」のトップ5に入ったドジョウ、タニシ、ウナギ、サワガニの共通点は?

昔は、「稻刈りのあとはドジョウ捕りをした」「手づかみでウナギ、ナマズがとれた」「アユが多くいろいろの漁法で捕られていた。今はアユ釣りは行なわれているが、その他の漁法は見かけなくなった」「海岸でノウサギ狩りができた。ハマボウ

フウは地域の人の山菜だった」と、捕獲の対象だった生き物多くいて、捕り方もいろいろだったようです。捕って、その後は…?(p.8の2をご覧ください)

### けものたちが身近になった?!

イノシシやシカ、サル、タヌキなどの比較的大きな哺乳類が「今」のトップ10に6種も入りました。「イノシシやニホンジカが増え、農作物等への被害を及ぼすようになった」「多くのサ

ルが里山に出没、畑の作物を食い荒らしている」「スキー場をやめた今、カモシカが出てくるようになった」と、農業など人間の活動との関係で目立つようになってきました。

### 外来種も2種が「今」のトップ10入り

ブラックバス(オオクチバス)、アメリカザリガニといった外来種が各地で身近なところに生息している状況が報告されました。「かつては、近所の小川にアカザ(ナマズの仲間)が

いたが、それに変わって今はブラックバスが入ってきた」「カエルはウシガエルばかりになった」などです。

### レンゲは思い出の風景に

植物で唯一トップ10入り(昔)したのはレンゲでした。しかし、今ではほとんど身近では見かけなくなっています。「春にはレンゲが一面に咲いていた」「田んぼや畔にはレンゲやタンポポが咲き乱れていた」「畔にはヒガンバナが咲いた」と、田畠の風景とともに報告されました。



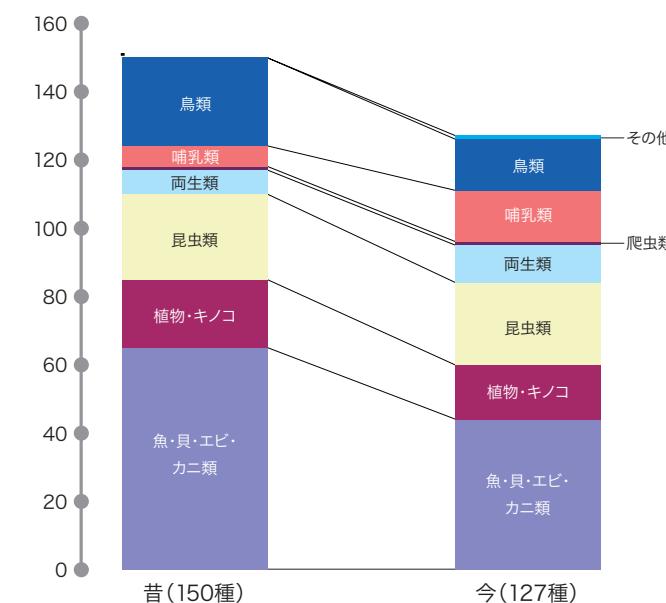
ほかにも、かつて身近だったのに今ではあまり見られなくなった生き物であげられたのは、植物ではレンゲに次いでヒシ、ヨシが多く、鳥では、キジ、カワセミ、フクロウ、魚介類ではフナ、メダカ、シジミ、ナマズなどでした。

### グループごとにみた身近な生き物の変化

生き物のグループごとに、今と昔の身近な生き物のようすを見てみると、魚・貝・エビ・カニの仲間が目立って減少していました。

種数や報告数の変化が大きくなりないグループでも、詳しくみると種類が違うものに入れ替わっていました(p.7参照)。

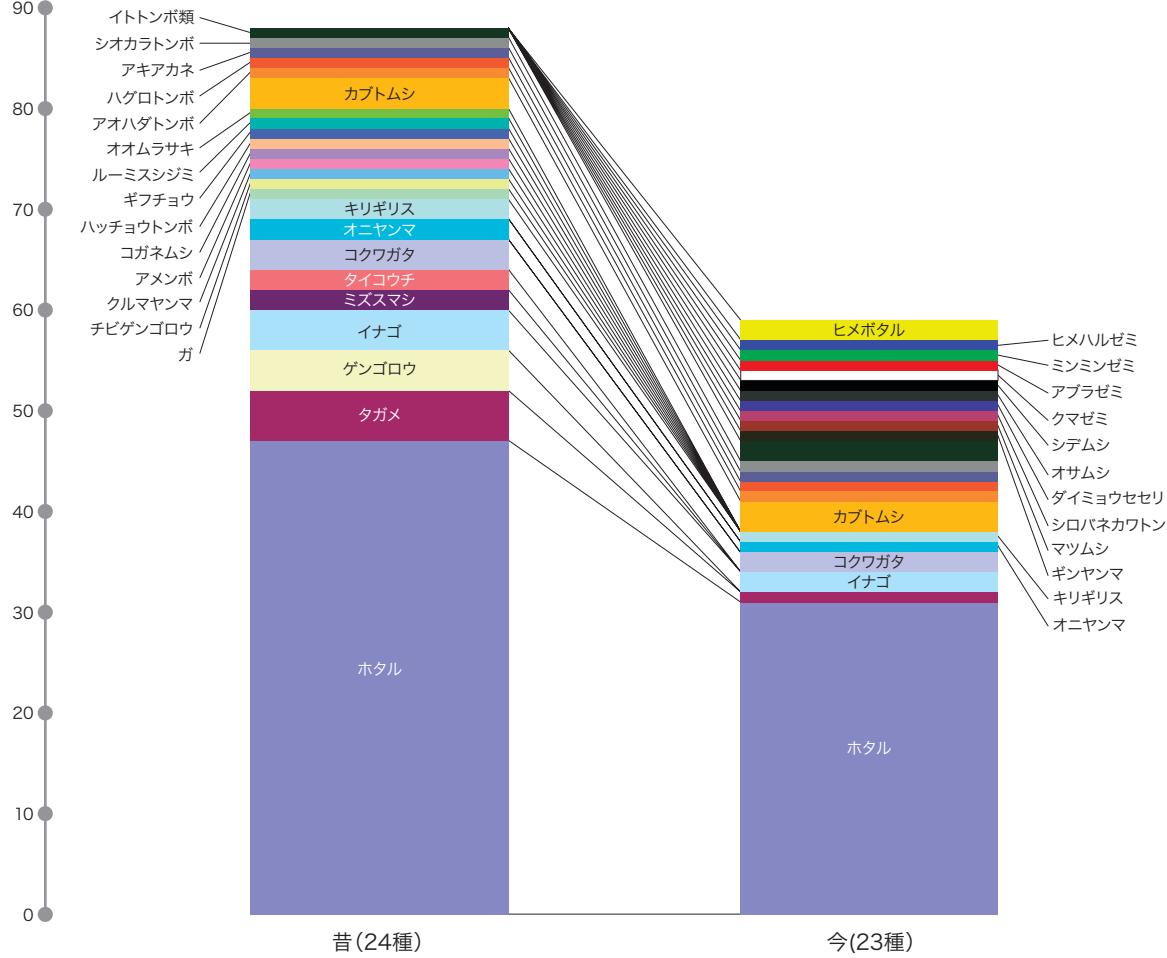
### ○身近な生き物の報告数



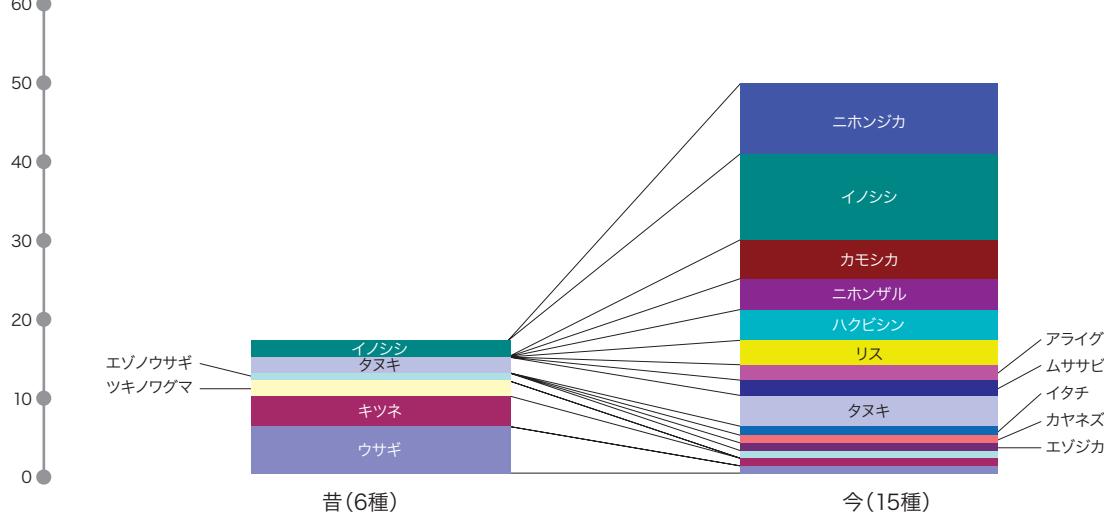
## 2. 「おやつやおかずになる生き物」の巻

### 「身近な生き物」の報告数

#### ①昆虫類



#### ②哺乳類



※「植物」、「魚・貝・エビ・カニ類」、「両生類」、「鳥類」など、詳しくはwebサイトで公開していますので、合わせてご参考ください。

かつては、周囲の自然の中からさまざまな生き物をとって、おやつや食事のおかずとして日常的に食べていたことがわかりました。中でも植物や魚・貝・エビ・カニ類がよく食べられていました。植物は、今でもよく食べられていますが、種類が大きく入れ替わっています。かつては、昆虫や両生類など今ではびっくりするような生き物も食べていたようです。

### よく食べる生き物・トップ5

#### (植物編)



#### 山菜は今のはうが人気?!

かつてはクワが断然トップでしたが、今ではほとんどあがらませんでした。アケビやカキ、クリ、タケノコ、ヨモギは今も昔も比較的よく食べられていました。

意外だったのは、ワラビ、タラ、セリ、フキ、ノビルなどの山菜は、今回の調査では「今」のはうがよくあがったことです。また、

クレソンは、「昔」はあがらなかったのに、「今」は5票を獲得し次点となりました。これらは、最近の山菜ブームやフレンチ、イタリアンといった洋食人気を反映した結果でしょうか。

人の暮らしの変化とともに、食べる対象となる生き物も変わっています。

#### (魚・貝・エビ・カニ編)



## 激減した魚・貝・エビ・カニの利用

ウナギが今も昔も不動のトップでした。日本人にとって大事な食材のようです。「ウナギは流し針で釣ったり、ウケで捕獲した」「コイ、フナ、ウナギは貴重なタンパク源で大人も競って捕った」などの報告がありました。

ただ、「今」では魚や貝、エビ・カニを身近な自然の中から捕つて食べることは、「昔」の1/10近くに激減していました。今回の

調査であがったこれらの生き物のほとんどは、池、沼、川、田んぼに生息しています。食べなくなった理由として、数が激減し、ほとんど捕れなくなったことが多くあげられました。

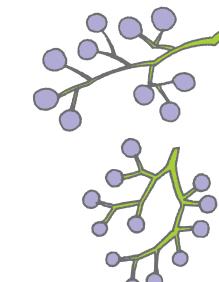
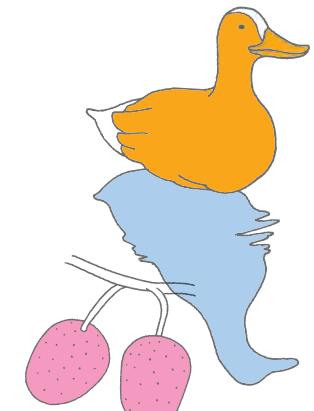
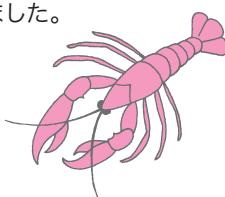
この利用の大きな変化は、これら水辺の環境が大きく変わり、生き物の生育・生息数の減少により、人々の付き合い方もまた大きく変化したことの表れといえそうです。

## (その他)

### こんなに食べてた!

これまで出てきた以外にもイナゴ、アカガエル、ヘビ、ノウサギ、カモ、キジなどいろいろな生き物を食べていました。調理のしかたもさまざまなものがありました。

- マツクイムシの幼虫を焼いて食べた
- ザリガニはまだ珍しく捕ってバリバリ食べた
- 池干しのとき、フナを持ち帰り井戸水で泥を吐かせて食べた
- 「へぼ(地蜂、クロスズメバチ)」などのハチの子は煮付け、炊き込み飯にして食べた
- ナマズ・ウナギ・小魚・シジミなど夕食のおかずを捕って食べた
- ヌカエビは寿司ネタに使用したほどとれた
- 夜の水田でカンテラを灯し釘を植えた棒でドジョウを捕った
- カモ、キジの産卵直後のものを食べた。卵を持っているかどうかは太陽に透かして確認した
- 海藻のイグス豆腐を作った
- 春のワラビはご馳走だった
- 伊勢湾台風が来るまでは、山でマツタケがたくさん採れた
- ニリンソウをおひたしにして食べた
- チガヤの若い穂の中の白い部分は噛むとほのかに甘くガム代わり
- 炭焼き稼ぎで山小屋に泊まり、ウナギ・ムササビなどをとり食べていた。回帰するマスも豊富だった
- アケビ、ムベ、グミ、桑の実、ヤマブドウ
- ウミニナを茹でて
- 花の蜜吸い(ツツジ)

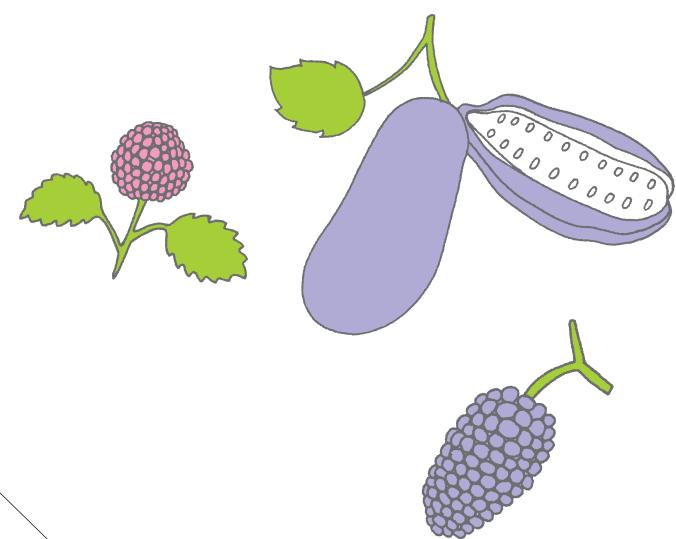
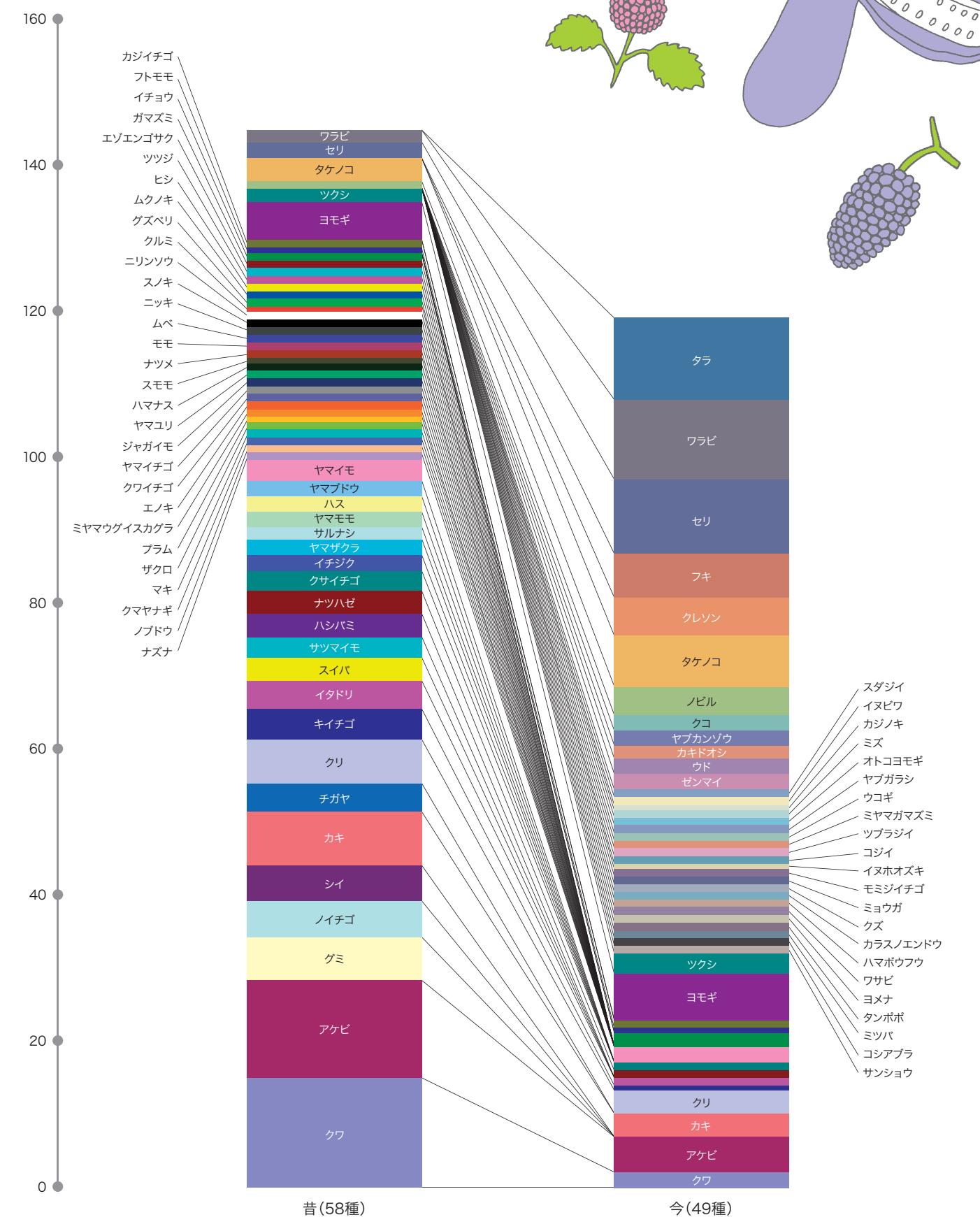


## 調査結果の背景にみられる今の状況

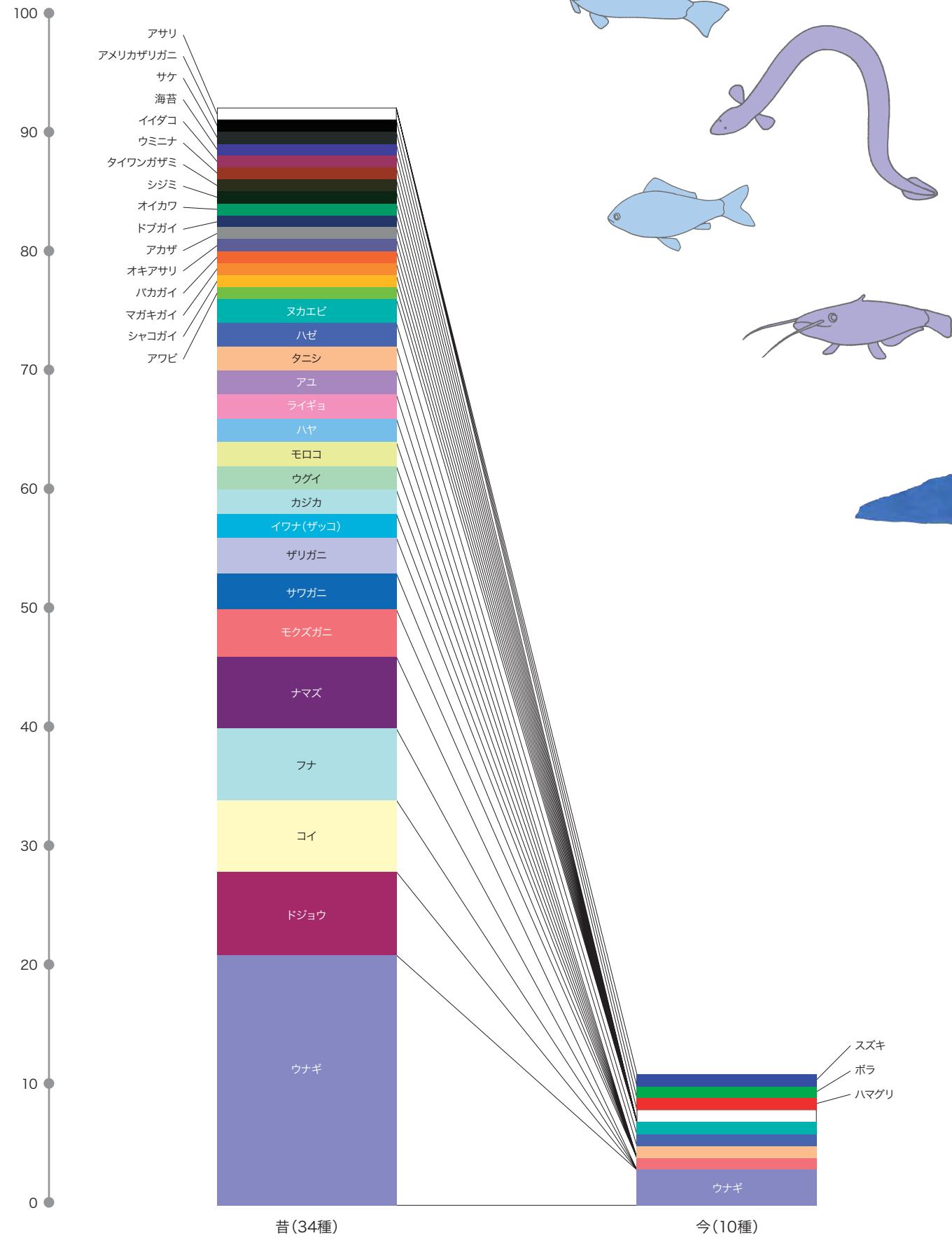
- コイヘルペス(ウィルスによるコイの病気)等があるのであまり食べない
  - 農薬等による水の汚染があるので、水の中の生き物を食べるのに慎重になる
  - カキがたくさんあっていてもほとんど採らない
  - コシアブラが山菜として人気がでた
  - ウド、フキ、ミツバ、タラを栽培して食べるようになった
  - 「森遊びイベント」で地域の高齢者の知恵を実践する取り組みをしている。
- 伝統的な食べ物の試食や里山の幸について学んでいる

## 「よく食べる生き物」の報告数

### ①植物



## ②魚・貝・エビ・カニ類

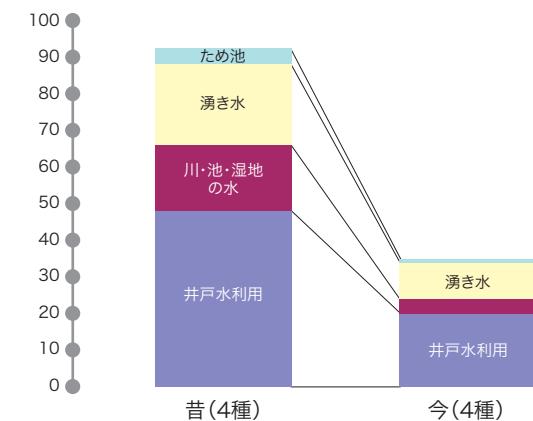


## 3. 「水もいろいろ」の巻

かつては、井戸水、川、池、湿地、湧き水、ため池等から水を得て暮らしていましたが、上水道が普及してからは、それらの利用は激減しました。まだ飲用に井戸水を使っているところもありますが、ほとんどは飲用ではなく、野菜や食器洗い、風呂、洗車や庭木への水やりに利用されています。その一方で、飲用に適している湧き水は、今でも人々に喜ばれて使われています。

また、今も川やため池、湧き水から田んぼに水を引いて使っていますが、水量の減少や水枯れの状況が各地から報告されました。河川工事や森林伐採の影響による水量の減少や、水質悪化への懸念も示されました。湧き水はあるけれど利用されずに側溝に流されたり、暗渠になっているとの報告もありました。

湧き水の新たな利用として、自然を復元するためのピオトープづくりの事例がいくつかみられました。おもしろいものでは「湧き水を使った流しそうめん店があった」(昔)、「井戸水の中にぬか床をいれて適温で漬物を作っている」(今)などの利用もあげられました。



## 4. 「生き物はオクスリ」の巻

報告数は少ないですが、今も昔も、薬として一番多く使われる生き物は植物でした。  
「昔」では、次いでマムシの利用が多かったようです。  
「マムシ酒をつくり、打ち身や虫さされ、擦り傷に使った」  
「しょうゆ漬を傷にぬった」などの報告がありました。

### 薬草・トップ 5



## すり傷、腹痛、熱さまし、虫さされならおまかせ

昔は、日常的によく起きる身体の不調や小さなケガには、家のまわりに生えているさまざまな植物が使われていたことがわかりました。

ドクダミ、ゲンノショウコ、センブリは腹痛や胃薬としてよく利用され、熱さましにはヤマユリやユキノシタ、傷の止血には

名前のとおりチドメグサのほか、イタドリやヨモギを使ったとの報告もありました。

今も、薬として利用する植物があるとの報告はありました  
が、実際に使うことはほとんどないようです。

## 生物多様性条約で注目される遺伝子資源

生き物が体内に持つさまざまな成分が、人のケガや病気に効く薬として利用されてきました。

今では、専門的に医薬品の開発が行なわれ、薬は買うものとなっていますが、その薬の製造や研究開発には、今も世界各地の生き物が持つ成分が不可欠となっています。

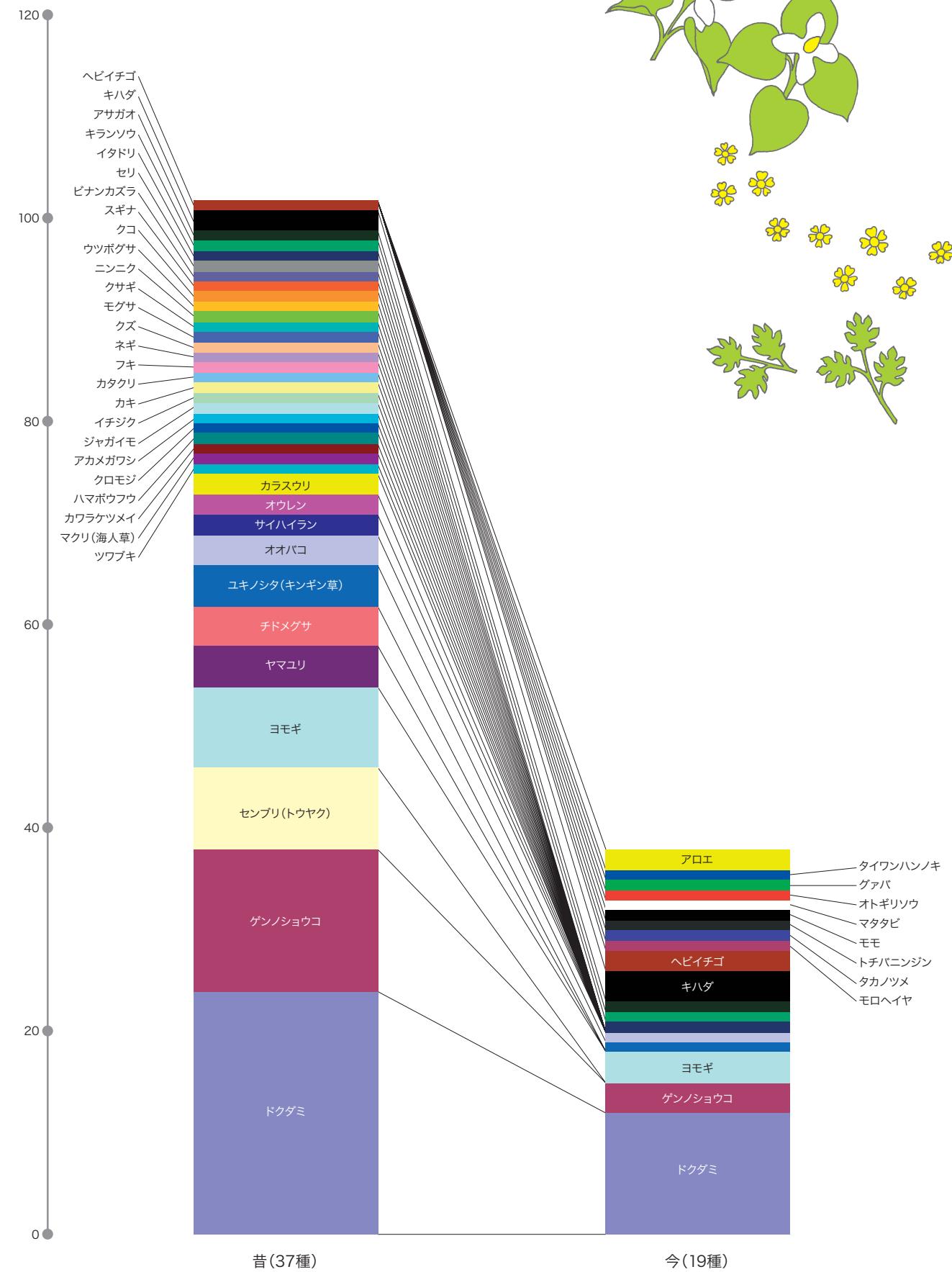
特に、新薬の開発のためには、未知の成分をもつ生き物を求めて、多様な生き物がすむ場所に製薬会社の関係者や研究者が入ります。生き物が豊かな場所は、例えば熱帯雨林の森などで発展途上国にあり、薬の研究開発が進んでいるのは先進国です。目当ての生き物を得るために方法がよくないと、その生き物と生育・生息環境に

悪影響を及ぼすほか、地元の人々の生活や地域の経済にも問題を引き起こし、途上国と先進国との間に軋轢を生みます。そこでは生き物が利益を得るための「成分(遺伝子)をもった資源」として扱われ、その恵みは誰の物かという権利の主張のぶつかり合いになるからです。ほかに、農作物の種子なども重要な遺伝子資源です。

生物多様性保全における「遺伝子資源」の問題の一例が、ここにあります。

生物多様性条約では、ABS(Access and Benefit Sharing)という解決すべき主要なテーマの1つとなっています。

## ◎薬に使われる植物の報告数



## 5. 「身近な自然はまるでホームセンター?!」の巻

### 生活資材・トップ 5



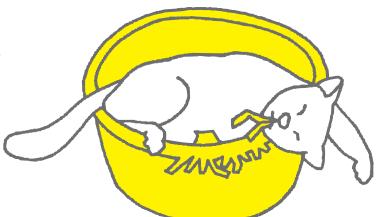
### 「昔」、タケの「かご」や「ざる」は入れ物として必需品

昔は、タケで生活や農作業に必要なものを作っていました。さまざまな用途の「かご」や「ざる」を編むほか、ほうき、垣根、桶のタガなどへの利用があげられました。スギは、家や樽の材料となり、皮は屋根を葺き、葉は焚きつけの燃料に使われていました。このほかにもタケやスギは刈り取ったイネを干すオダの支柱にも使われました。ヨシは葦すや萱葺き屋根に、イネはわらとして縄や俵、草履を作りました。

ヤマザクラやシラカシは鍔や鎌、鉈などの柄に使われていました。グラフの集計には入っていませんが、川や海の岸辺に流れついた流木を拾い集めて焚き木にしたり、海草・海藻・水草を畑の肥料に利用していたとの報告もありました。

この項目で唯一、動物であがったタツナミガイ(海でくらすアメフラシの仲間)が出す紫色の体液は染料として利用したそうです。

「マタタビのつるでかごを作り、さまざまな物入れとして利用していたが、猫がそれをかじっていたという話はめずらしかくなかった」といったエピソードもありました。



### 「今」は民芸やクラフト、野外活動での利用

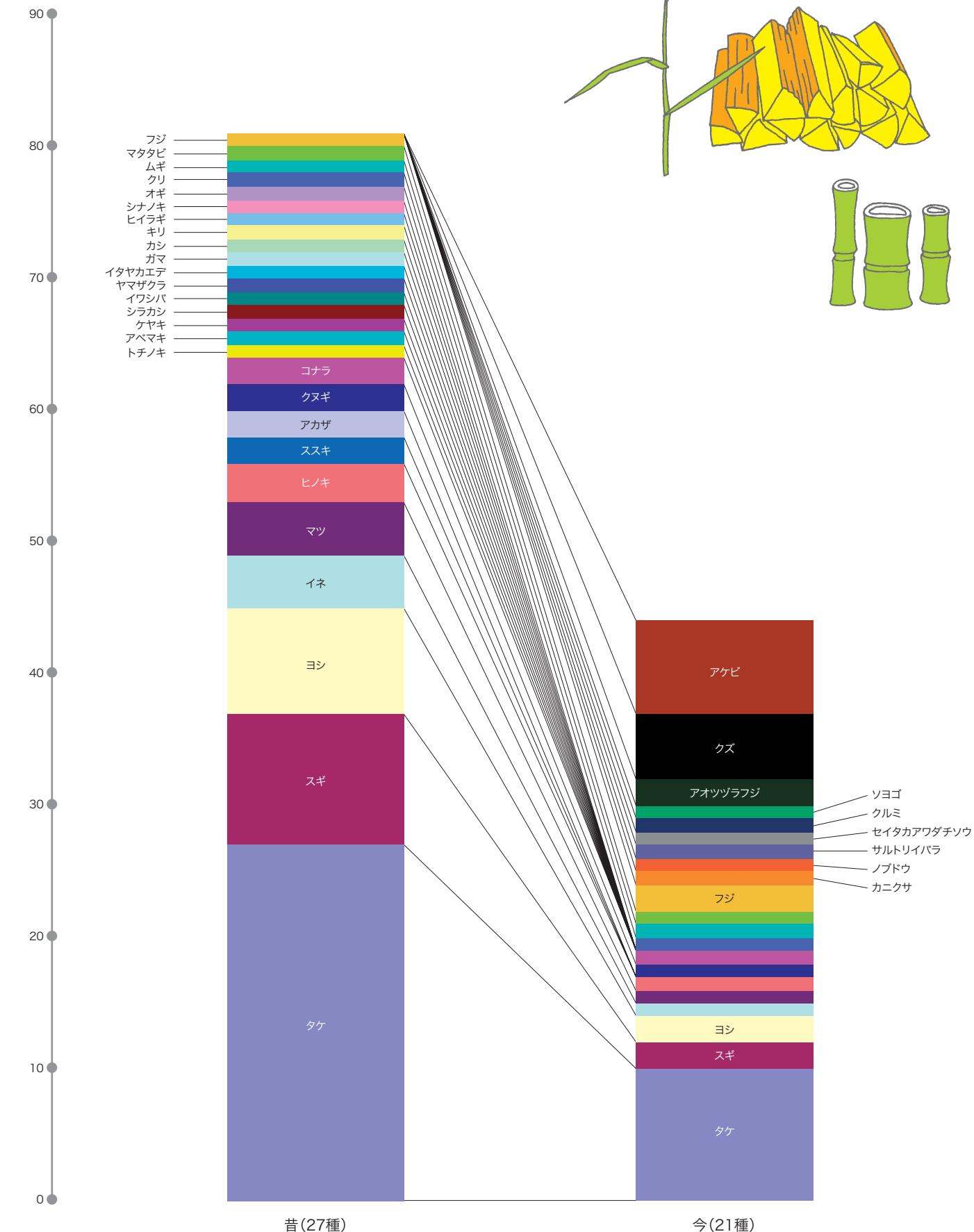
今もタケの利用がトップでしたが、その内容は大きく変わっていました。趣味の竹細工や子どもたちとの活動で竹馬や竹籠を作るといったものでした。

昔はあがっていなかったアケビ、クズ、フジ、アオツヅラフジは、つるでクリスマスリースやかごを編むのによく利用されています。流木も燃料ではなく、飾り物や彫刻の材料に、クルミや

クリは草木染めにというように、クラフト利用が多くあげされました。

間伐材での炭焼きや薪でキャンプといった野外活動での利用もあがりました。イネ、ヨシのわらでのしめ縄づくりは、今でもみられる数少ない昔ながらの利用です。

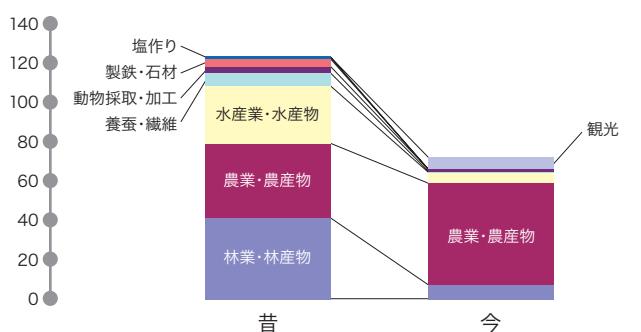
◎材料・道具に使われる植物の報告数



## 6. 「地域の自然を利用した産業」の巻

自然と関わりの深い第一次産業。

今回の調査では農業が増えていたのに対し、林業と水産業がどちらも約1/6に激減していました。昔はなかったのに、新しくあげられた産業は観光業で、その内容は釣り、エコツアー、遊覧船、スキューバダイビングなどでした。



### 多様な産物を生む小規模の加工業と商い(昔)

現在は、竹林の拡大が問題となっていますが、かつては「竹林はタケノコのほか、タケの材をカキいかだや製塩用など多用途に使われ、収益も多く大切にされていた」(香川)とあるように、「かご」などの日常の生活用品だけでなく、他の産業にも活用されていたことがわかりました。

林業・林産物の中には、「マツの枯れ枝、松葉を集めて生計を立てていた」(福井)、「山に生えるシキミやサカキを取って東京へ出荷していた」(千葉)、「薪を燃料とした陶磁器作り」(愛知)など、小規模でさまざまな経済活動が見られました。

ほかにも農業と関係して「水田でドジョウをとり売った」(三重)、「ため池でコイを養殖していた」(群馬)との報告がありました。水産業では、かつては川魚の漁で生計を立てていたことが多くありました。

動物を利用した産業では、マムシとりのほか、「狩猟が盛んで力モが駅前に並べられて売られていた」(鳥取)、「イタチがたくさんとれ毛皮を売る人もたくさんいた」(北海道)等があがりました。

また、水車を利用した粉引き、油絞りといった産業も各地から報告されました。

### 新しい産業への試行錯誤(今)

現在は、数は少ないですが、ヤマノイモ(自然薯)の報告が目立ち、「道の駅にヤマイモのむかごやマタタビなど自然に収穫できるものが盛んに販売されている」「産直野菜をやって

いる」といった自然食や新たに価値付けされた農産物の流通を反映したものや、エコツアー、里山の保全活動の一環としての炭作りなど、新しい産業としての試行があがりました。

## 7. 「子どもの遊びと仕事」の巻

身近な自然の中での子どもたちの遊び、仕事で最も多かったのは、今も昔も生き物をとて遊ぶことでした。「昔」は、次いで川遊びが多く、以下、農作業、薪で風呂焚き、薪集め、家畜の世話、水汲みなど、家の手伝いの仕事が上位にあげされました。「今」では、川遊びは全くなくなり、仕事は農作業の手伝いがわずかにあつただけで、それ以外の子どもの仕事は全くみられなくなっていました。「昔」はなく、「今」ある遊びは、バードウォッチングと環境学習の一環としての野外での遊びでした。子どもの遊びや仕事の種類は「今」はかつての1/3に激減しました。

### 地域の自然の中での生き物とり

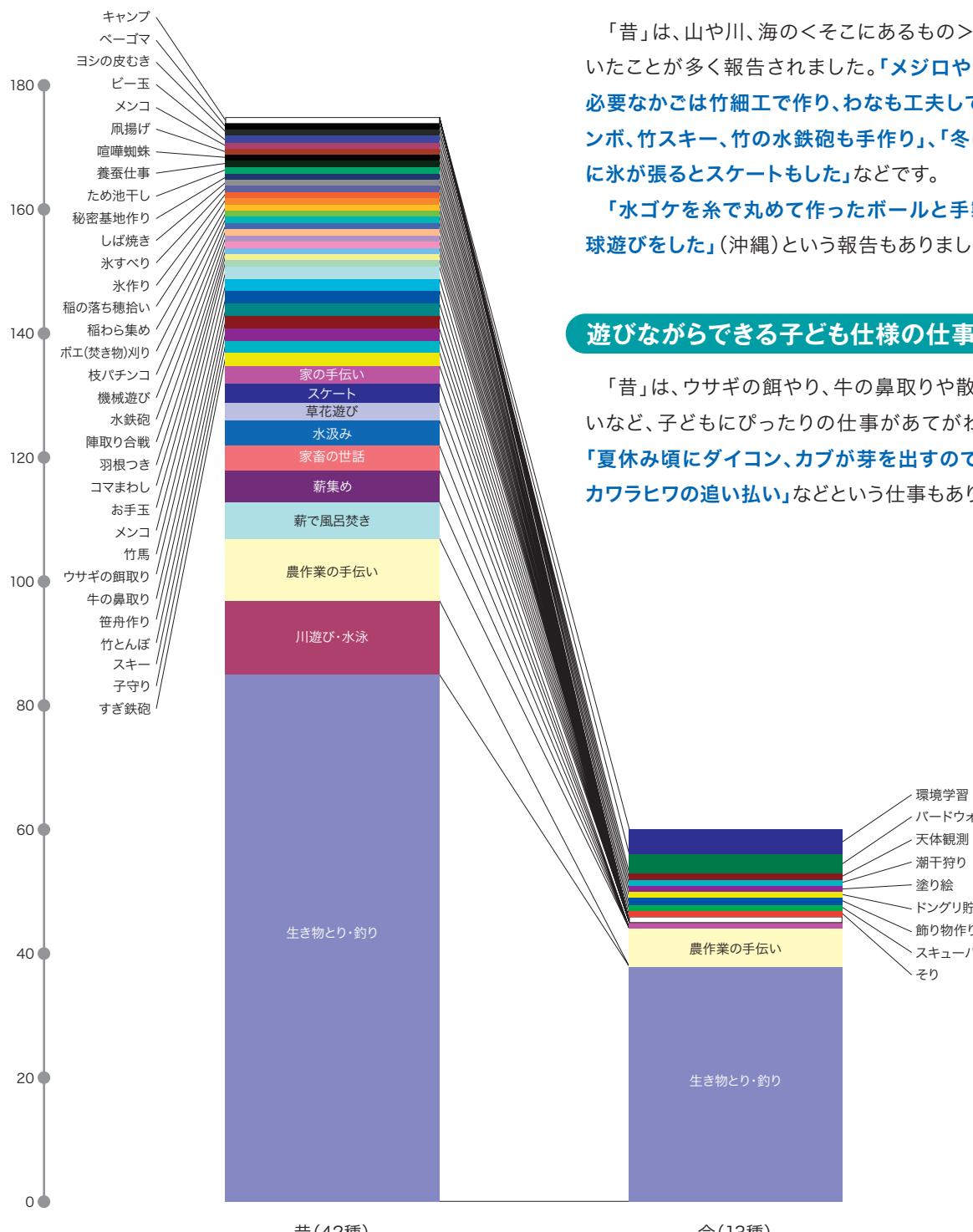
子どもの遊び相手となって、よく捕まえられたのは、「昔」はウナギ・フナ・ドジョウ・ハヤといった川や池の魚が圧倒的に多く、次いでカブトムシ・クワガタ・イナゴなどの昆虫でした。カブトムシとクワガタは今のはうが多くあげされました。

「今」は法律(鳥獣保護法)で規制されていますが、かつては、

メジロやスズメ、ヤマガラ、シジュウカラ、ホオジロ、コジュケイ、マヒワなどの野鳥を捕まえて遊ぶこともよくみられました。やはり遊び相手としては動物が多くあげられ、植物はアケビ、クリなど少数でした。



### ◎自然の中での子どもの遊びと仕事



### 遊びながらできる子ども仕様の仕事

「昔」は、ウサギの餌やり、牛の鼻取りや散歩、稲の落穂拾いなど、子どもにぴったりの仕事があつてがわっていました。「夏休み頃にダイコン、カブが芽を出すので、それを食べるカワラヒワの追い払い」などという仕事もありました。

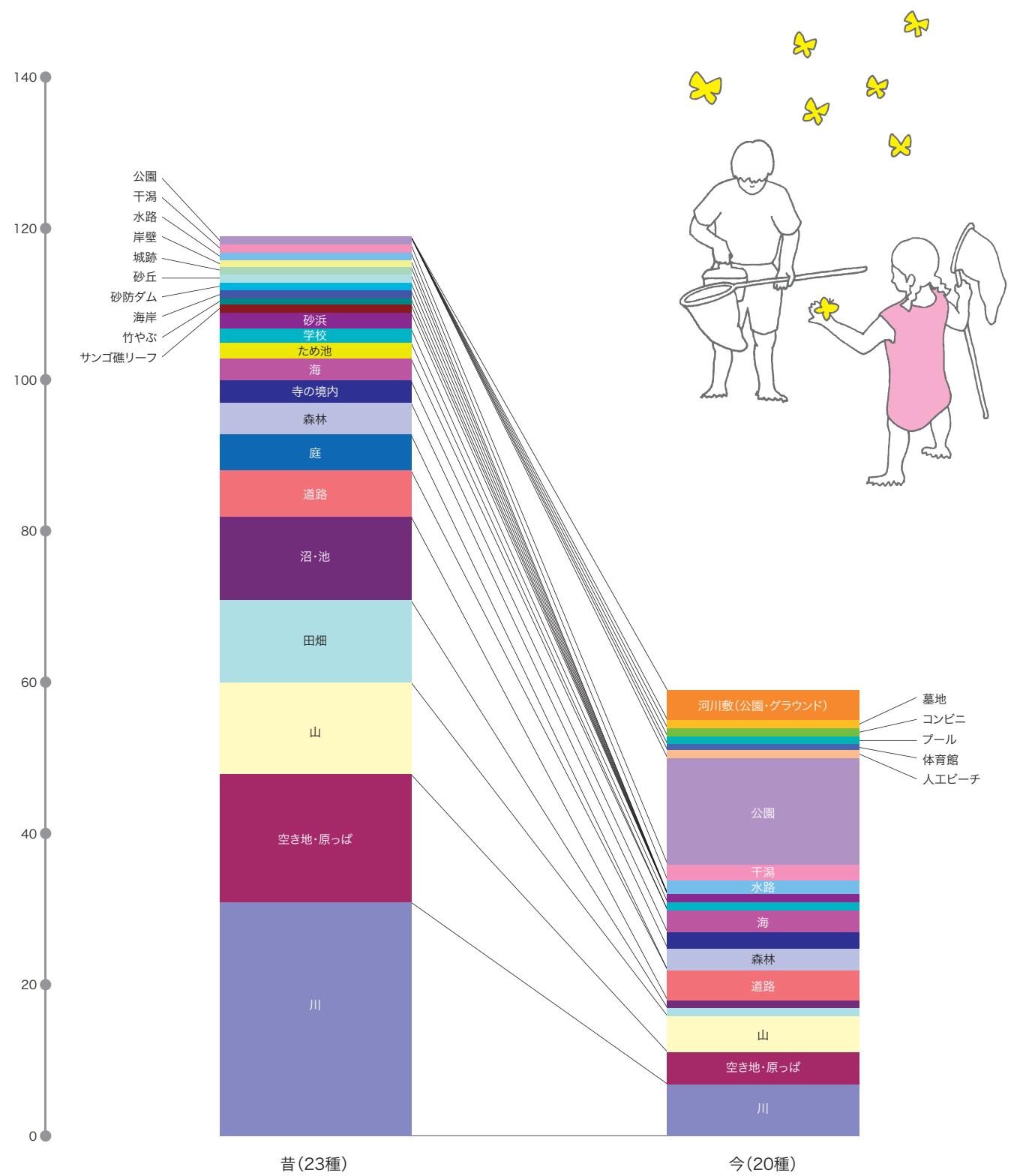
## 8. 「子どもの遊び場」の巻

「昔」は、川・空き地・原っぱ・山・田畠・沼・池が遊び場の2/3を占めていましたが、今はとても少なくなりました。代わって、かつてはほとんどあがれなかった公園、河川敷(公園、グラウンド)が多くあがりました。

「砂浜が広かったのでいろいろな遊びができる」(昔)、「池

は埋め立てられて運動場になった」(今)というように、遊び場だった自然が変化してしまったことも報告されました。

河川は危険、海は怖いところ、池は危険な場所、子どもだけ遊ぶのは危ない、など今の遊び場についての報告には「危険」の文字が目立ちました。



## 9. 「地域で伝える知恵と技術」の巻

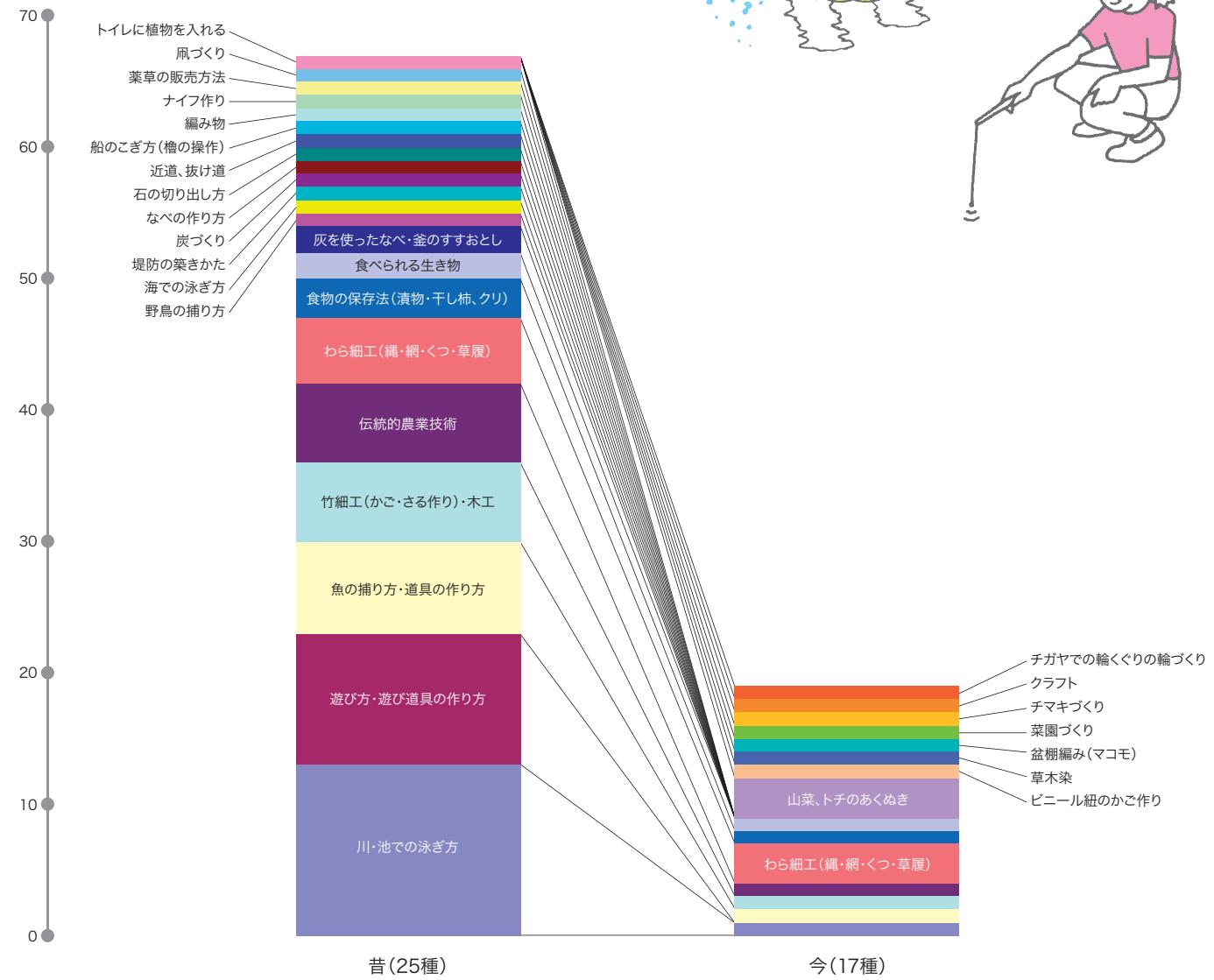
### 地域の中で伝えられた技術・トップ 7

昔

- ①川・池での泳ぎ方
- ②遊び・遊び道具の作り方
- ③魚の捕り方・道具の作り方
- ④竹細工(かご・ざる作り)・木工
- ⑤伝統的農業技術
- ⑥わら細工(縄・草履など)
- ⑦食物の保存法

「今」では、ほとんど伝えられることは少なくなってしましましたが、縄作りと山菜のあく抜きが比較的多く伝えられています。「昔」は年長者やがき大将が伝える役で、その重要性が多く指摘されましたが、「今」は環境学習、総合学習といった場で、かろうじてその役の一部を果たしているようです。

### ◎地域に伝わる技術と暮らしの知恵



## 10. 「地域の行事と祭り」の巻

「昔」の報告で多かったのは、夏の祭り、盆・盆踊りでした。次いで正月のどんど、秋の十五夜、秋祭り、地区、季節ごとの講や行事があげられました。今でもどんどや秋祭りは引き継がれて行なわれているものが多いようです。

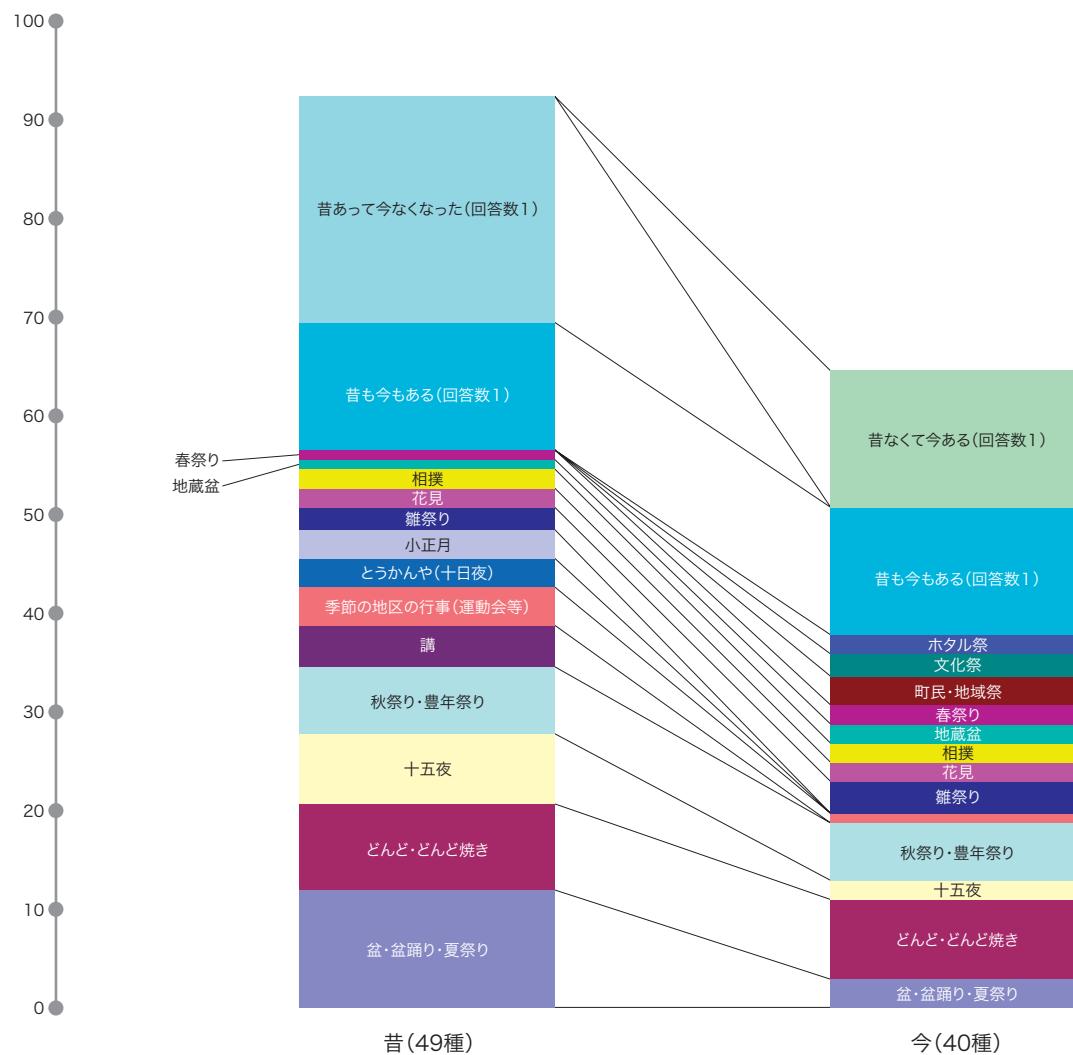
地域の行事や祭りは、全体的には今では少なくなっています。その理由として、行事にかかる人手、労力不足があげられました。引き継がれて行なわれていても、規模や時間を縮小させた、地区ごとにやっていたものを町全体でやるようになった、一部を取りやめたという報告がありました。また、行事の意味が伝わらず流れでやっているだけ、農に関する行事だったが農業が衰退したため健康祈願に意義を変えてやっているといったものもありました。

昔はやっておらず、新しく行うようになったものは、文化祭、ホタル祭り、ウォーキング大会などイベントが多くあげられました。



これらの行事や祭りは地域性が強く、似たようなものでも少しずつ違うため、回答数1として扱うものが多くありました。生き物に直接関係しているものとしては、花見、ホタル狩、もみじ狩といったレジャーのほか、鳥追い、オンカ送り(虫送り)、とうかんやなど、農と関係の深いものがあげされました。「とうかんや(十日夜)」は、子どもたちがワラ束で地面をうって練り歩き、農作物を食べてしまう地中のモグラやネズミを追い払う行事です。

### ◎地域の行事、祭りの報告数



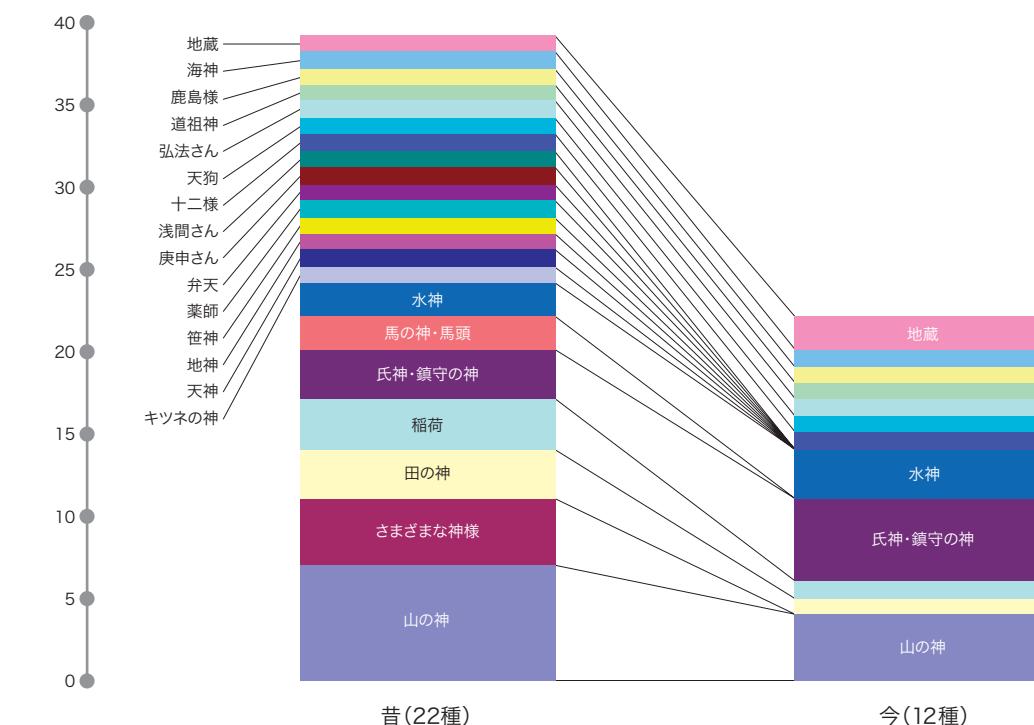
## 11. 「地域の神様」の巻

今は昔と比べ、日常的に付き合いのある神様の種類が減少していました。

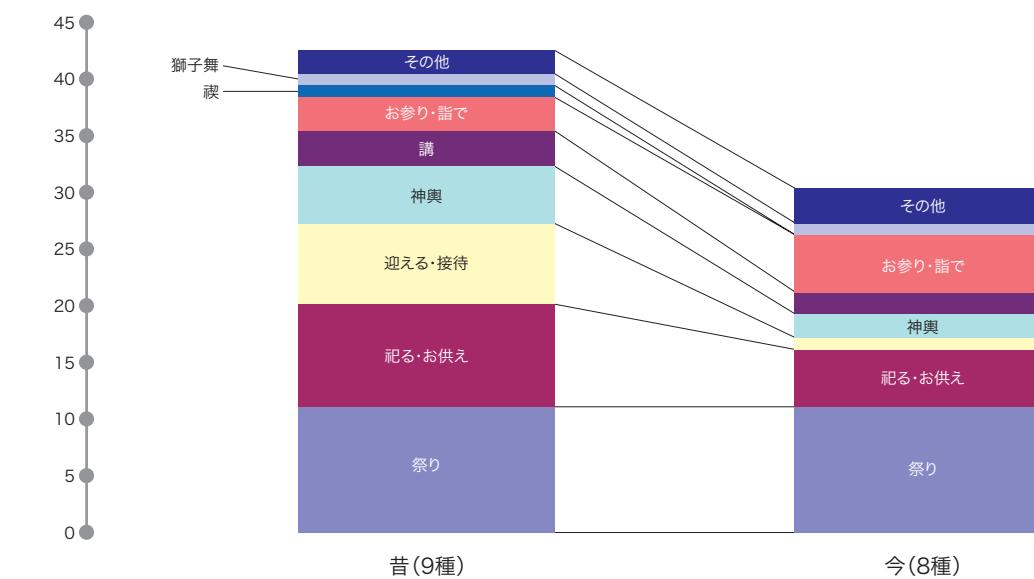
「昔」は、山の神、田の神、稻荷、氏神の順で多く、「今」は氏神、神社が多くあがりました。また、「昔」の回答では、具体的な神様の名前をあげず、いろんな神様、さまざまな神様がいたとあったのが特徴的です。「今」でも山の神、田の神、水神があげら

れていますが、祠や石像があるという報告が多いのに対し、「昔」は神様へのお供えやまつりとセットで報告されました。神仏との付き合いのかたについては、今も昔も季節の行事として祭りが多くあげられました。一方、お供え、お迎えなど日常的な付き合いは減少していました。

### ◎地域の神様についての報告数



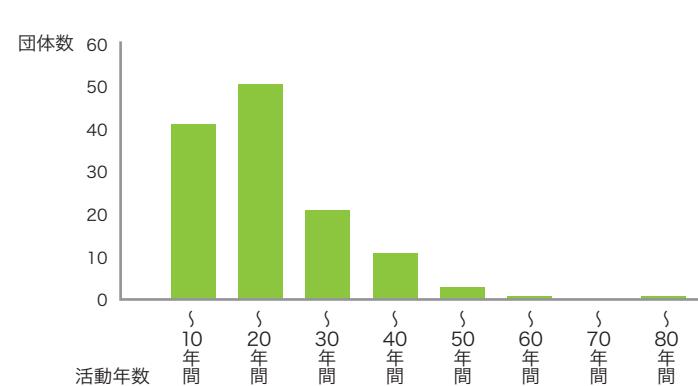
### ◎地域の神様等との付き合いについての報告数



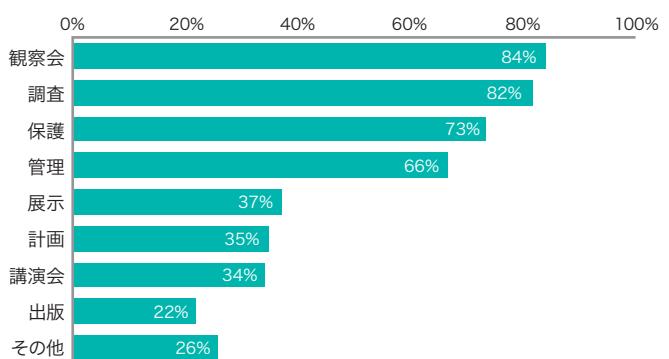
## 12. 「生物多様性を守る市民の活動」

### 生物多様性を守る全国の市民団体の活動内容

調査には全国から147の団体に協力いただきました。里やまで活動する団体が最も多く、次いで河川や都市緑地で活動する団体となっています。活動年数別に見ると、10年以上活動しているベテラン団体が多くなっています。



#### ○活動の内容(複数回答)



それらの団体の活動で最も一般的だったのは観察会、次いで調査活動、保護活動、フィールドの管理活動などでした。図にあげた8種類の活動のうち平均すると各団体の活動種類数は5種類となっていました。

### 活発化する市民調査

調査を実施している団体が84%にのぼったことは驚きです。単純な比較はできませんが、2000年に実施した同様のアンケートでは調査を実施している団体は46%に過ぎませんでしたので、市民による調査活動がより一般的になってきたのかもしれません。調査内容のうち最も多かったのは植物(全団体の61%)で、次いで鳥類、植生、水環境、魚類となっていました。生き物だけでなく、歴史(22%)や人と

自然のふれあい(21%)も多くみられました。

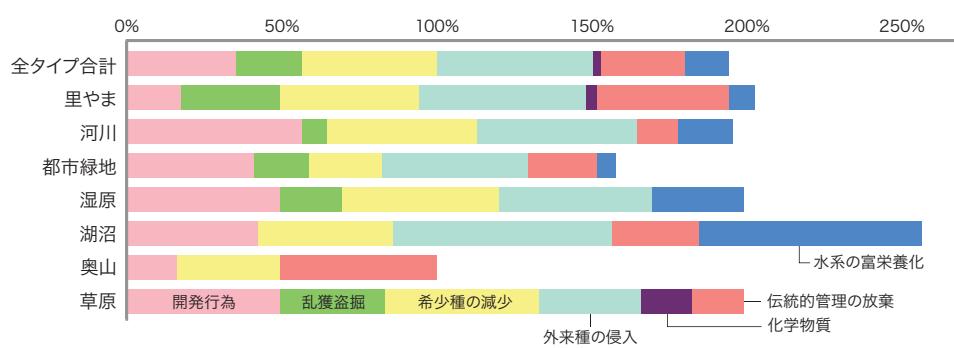
もう一つの特徴は、複数の調査を実施している団体が9割以上とほとんどで、平均4.8項目の調査を実施していました。複雑な生態系の変化を読み解くには様々な角度からの調査が必要とされていますが、多くの市民団体がそれを実践しているようです。

### フィールドに迫る脅威と、自主的な保全活動

フィールドの生物多様性を脅かす要因として最も多く報告があったのが「外来種の侵入(全団体の50%)」で、次いで希少種の減少(44%)や開発行為(35%)などがあげられました。生態系タイプ別にみると、図のように乱獲盗掘は里やまや草原タイプの場所で特に多く、伝統的管理の放棄

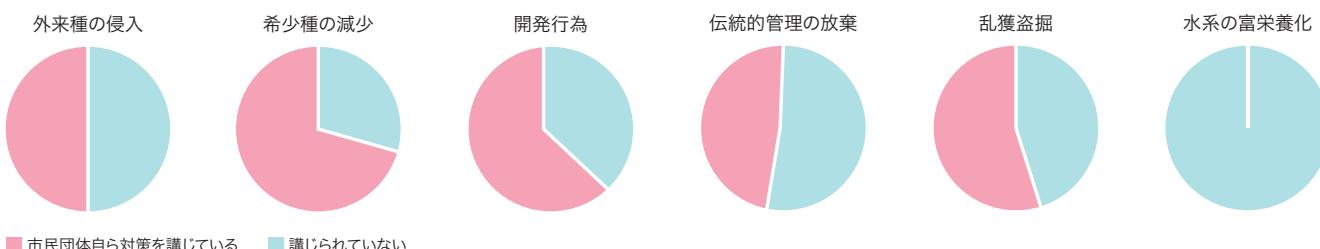
は里やま・奥山で、富栄養化は湖沼や湿原で多く「脅威」として挙げられているという違いがありました。一方、共通点として全てのタイプのフィールドが複数の脅威に同時にさらされているという深刻な状況にあることも明らかとなりました。

#### ○全サイトに占める比率(積み上げ)



アンケート対象となった約7割の団体が、こういった脅威に対して何らかの自主的な保護活動やフィールド管理活動を実施していました。特に希少種の減少や開発行為に対しては、市民団体自らが対策を講じている場所が多くみられ

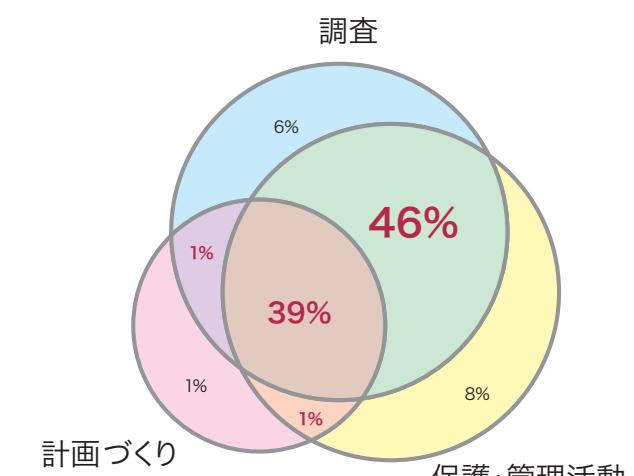
ました。外来種や伝統的管理・富栄養化の自主的な対策の割合が低くなっていたのは、効果的な対策に地方自治体や地権者・周辺住民など、幅広い協力が必要なことが要因かもしれません。



### 地域の市民が担う日本の生物多様性保全

フィールドの生物多様性の保全のためには、保護・管理活動を進めるとともに、調査によって現状を把握したり、活動の効果を評価することが重要です。また、様々な方が関わる場合には、保全計画を作りてフィールドの目標像を共有したり、役割分担を明確にしておくことが大切です。

アンケートの結果、調査活動と保護・管理活動の両方を実施しているのは実に全体の85%にのぼり、そのうち39%の団体は計画作りも行っていました。行政や専門家の関わる保全対策事業の多くが計画だけであったり、調査だけであったりする中、各地域の市民団体こそが、各地の生物多様性の保全を着実に進める担い手となっていることを表しているといえます。



### 生物多様性モニタリングに不可欠な市民調査

2010年10月に名古屋で開催された生物多様性条約COP10では、これから10年間で生物多様性保全を進めるための新しい計画が作られました(新戦略計画)。そして、その計画を支える科学的なデータを得るために生物多様性を地球規模でモニタリングする「グローバル生物多様性観察ネットワーク」の構築も進められています。

地球のすみずみまで広大な範囲を継続的に調査すること

は専門家だけでは困難で、これまで地域で地道な調査を続けてきたNGOや市民による調査が必要不可欠です。またそれだけの実績も持っています(NACS-Jが運営する環境省のモニタリングサイト1000里地調査など)。条約のモニタリングネットワークにも地域の人たちが行なう生物多様性のモニタリングも組み込まれ、地域の保全に活用される必要があります。



## 身边な自然とともに生きる“豊かさ”

各地から届いたA4サイズ9ページに及ぶ調査用紙には、そのほとんどに地域の生物多様性と生態系サービスについての記述がぎっしりと書き込まれていました。現在はともかく、昔の様子についても記入欄いっぱいに書き込まれていたのには驚かされました。日常の暮らしの中での生きものとの出会いや、「とる」「食べる」「つくる」「遊ぶ」といった、身体ごと生き物とふれあった記憶が残っていたからでしょうか。

50-60年経った今でも、数多くのホタルが飛ぶかつての様子について、読んだ私たちにその光景を想像させてくれるほど、いきいきとした多様な表現で報告がありました。それは見た人の心に何かが焼き付けられていたからでしょう。日常の中で、このような心が振れる瞬間があることこそが“豊かさ”ではないでしょうか。

調査結果から、今の暮らしは、生き物との関係が濃密だった昔の暮らしとは随分変わってしまったことが分かります。しかし、形を変えて、身边な自然とともに暮らす“豊かさ”を紡ぐ新

しい活動が生まれていることも知ることができました。自然観察会や調査、森・里やま・川・湿地・海辺・緑地などの保全復元といった生き物や自然と身体ごとふれあう活動が全国で数多く報告されました。

中には、地域の自然を活用した保全型の経済活動を視野に入れ、身边な自然とともに地域で生きていく道を探る試みがなされていることも分かりました。

これら身边な自然とともに生きることの豊かさ、大切さに気づいた地域が、地球上のそこここに生まれ、積み重なって、未来に続く生物多様性の道を作っていくのでしょう。そんな地域や市民とともに、行政も企業もNGOもCOP10で決議した生物多様性保全の新目標達成への道のりを歩まねばなりません。

最後に、保全活動の合間にぬって、「生物多様性の道」に登録し、本調査にご協力くださったみなさま(別掲)の日頃の保全活動に敬意を表するとともにこの場を借りてお礼申し上げます。



## 生物多様性の道プロジェクトとは

### 生物多様性の実感を地域の暮らしに引き戻す

生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)は、これから10年の新しい目標「生物多様性の損失を引き起こす根本の原因に対処し、これ以上の損失を止めるためのあらゆる方策を講じる」を決め、幕を閉じました。

この間、さまざまな「生物多様性」をめぐるイベントや報道が活発になされましたが、生物多様性保全への取り組みはいよいよこれからが正念場です。

日本自然保護協会では、関心が高まりつつある生物多様性保全を、COP10という政治的交渉・議論のレベルから、現場の保全活動や地域での暮らしのレベルに引き戻し、地域の人たちが生活実感を持って、主体的に生物多様性の保全を進めていくことを再確認するために企画、実施しました。

国際会議でよりよい保全目標が決ることは大事な一步ですが、立派な目標が立てられても言葉だけであったり一部関係者だけのものでは、保全は進みません。保全の意識がひとりひとりに芽生えてこそ持続的な生物多様性保全の取り組みが進みます。

一方、「生物多様性」の言葉を使わなくても、日本各地

の森林や河川、干潟、里やま、湿地、海辺で生き物と生態系を保全する取り組みは、NGOや市民、専門家、自治体等によって以前から行なわれています。これらの活動が、日本の生物多様性保全を牽引してきたといっても過言ではありません。これらの人たちがCOP10の新目標に掲げられた重要な保全の担い手なのだ、ということが広く伝えられたでしょうか。また、会議の席についた政府関係者はそのことを深く認識したでしょうか。地域で地道に保全活動をしている人たちと、条約の目指す国際的な生物多様性保全が遠いものであっては、COP10で決議されたさまざまな行動計画の実効性は確保できません。

生物多様性の道プロジェクトでは、2009年7月から2010年10月までの期間、具体的な地域の保全活動を通して、生物多様性保全の大切さを感じとができる6つの活動を実施しました(<http://www.nacsj.or.jp>)。

本書は、その活動の1つ「市民が五感でとらえた地域の生物多様性と生態系サービスモニタリング」の調査結果を紹介したものです。

### 日本の生物多様性—「身边な自然」とともに生きる

市民が五感でとらえた地域の「生物多様性」と「生態系サービス」モニタリングレポート2010  
2010年10月発行

著者:NACS-J生物多様性の道プロジェクト 生態系サービスモニタリングチーム  
企画・解析・執筆:開発法子、廣瀬光子、高川晋一、小此木宏明、篠原光穂

編集・デザイン:結デザインネットワーク

デザイン・イラスト:蒲原久雄

写真:伊藤信男、青木邦夫、依田宏、萩原清司、朱宮丈晴、出島誠一、福田真由子

発行:日本自然保護協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-16-10 ミヨビル2F

TEL. 03-3553-4101 FAX. 03-3553-0139

<http://www.nacsj.or.jp>

© NACS-J